

## 小説に登場した寺田寅彦

四宮 義正

夏目漱石が著した「吾輩は猫である」の水島寒月、「三四郎」の野々宮先生のモデルが寺田寅彦であることはあまりにも有名であるが、その後にも寅彦が登場する小説、戯曲などが発表されている。気がついた数点を紹介してみたい。

◎荒俣宏「帝都物語」1985年（角川書店）

著者の小説デビュー作、第8回日本SF大賞受賞作品でもある。手元の角川文庫版では全12巻構成である。巻名は1、神霊篇 2、魔都（バビロン）篇 3、大震災（カストロフ）篇 4、龍動篇 5、魔王篇 6、不死鳥篇 7、百鬼夜行篇 8、未来宮篇 9、喪神篇 10、復活篇 11、戦争（ウォーズ）篇 12、大東亜篇となっておりこれだけでも怪奇幻想性が想像できる。寅彦をはじめ洪沢栄一、幸田露伴、西村真琴など実在の人物と加藤保憲、辰宮兄妹など架空の人物が複雑にからみあって展開する。寅彦は帝都破壊を目論む謎の軍人加藤と対決するが第5巻で亡くなってしまう。死の直前に幸田露伴が寅彦を見舞う場面はリアルである。

小林勇「回想の寺田寅彦」によると露伴が寅彦を見舞ったのは昭和10年11月21日であり、激痛に襲われた時に、痛みについて考えるか、別のことを考えて気を逸らすかといったことが話題になったようで、小説では同書を基に死が近いことをお互いに知った上での思いやりのある会話に仕上げている。

第1巻から4巻までが映画化されて1988年に公開された。加藤保憲役で活躍した嶋田久作の特徴ある顔を覚えている方も多いと思う。ちなみに寺田寅彦の役は寺泉憲が演じた。

◎奥泉光『「吾輩は猫である」殺人事件』1996年（新潮社）

麦酒に酔って溺死したはずの「名前のない猫」が上海に現れて珍野苦沙弥先生の殺害を知るところから物語が始まる。国際都市上海を舞台にしてイギリス猫ホームズやドイツ、フランス、中国の猫による一大推理合戦、虞美人丸船中での大冒険譚、漱石の「夢十夜」をうまく取り込んだ話もあり、最後は科学者寒月による大発明実験へと続く。東風、迷亭、多々良三平といったおなじみの面々が得意の話術を駆使している。猫の間脳で生成される特殊物質を駆動源とする「時間旅行機」の実験を指揮する寒月はいかにも頼もしい。

◎楠木誠一郎「名探偵夏目漱石の事件簿 象牙の塔の殺人」1999年（廣済堂出版）

若き日の漱石（夏目金之助の時代）と寅彦が殺人事件に遭遇し師弟コンビが主役で大活躍する長編ミステリー。枕に一高生藤村操の日光華厳の滝での投身自殺事件を据えている。漱石の「吾輩は猫である」その他の資料を読み込んで、漱石と寅彦の師弟であるとともに互いに敬愛する友人でもあることが感じられる軽妙な会話が楽しめる。また「名前のない猫」も主役級の扱いである。

◎奥泉光「新・地底旅行」2004年（朝日新聞社）

ジュール・ヴェルヌの「地底旅行」を下敷きにして場所を日本に置き換えたSFアドベンチャー小説。登場するのは水島寒月の弟で水島鶏月（けいげつ）である。理学者であり東北帝大で教師をしていることになっているが、モデルは寅彦と思われる。富士山麓の洞穴から地下に侵入し、ハワイ島キラウエア火山から脱出するまでの大冒険がにぎやかにくり広げられる。

◎ 柳広司「漱石先生の事件簿 猫の巻」2007年（理論社）

五高時代の寅彦と思われる人物が千駄木の夏目家の書生（同居人）となり「吾輩は猫である」をなぞって物語が進行する。この書生、名前が出てこないが「僕」として進行役を果たしている。迷亭、東風、寒月、金田夫人などお馴染みの人物が登場する。事件簿という程の大事業は起きないが二弦琴のお師匠さん宅の三毛猫殺害事件や夏目家の名前の無い猫の溺死について寒月の推理が展開され探偵のように活躍する。

◎ 安岡章太郎「鏡川」2000年（新潮社）など

著者は寅彦の親類筋の人であり、故郷土佐の江戸末期から明治維新の歴史や自身の家系を詳しく述べた、普通の意味での小説とは少し違った作品が多くある。自身の母方のゆかりを描いた「鏡川」では寅彦の「龍舌蘭」を引用して朝倉村の伊野部邸での思い出が挿話となっている。岩波書店から刊行された短編小説集『放屁抄』（1979年）に収められた「血ぼくろ」では父の日記と寅彦の「亮の追憶」から父の若き日の姿を描いている。また土佐勤王党、天誅組、会津遠征などにおける安岡一族の動静を描いた長編「流離譚」1981年（新潮社）でも縁者の消息をたどるときに寅彦の日記（明治34, 35, 36年）を引用し補足している。この遠戚の女性は寺田夏子の看病をしていたようである。井口村事件についても詳しい。

◎ 吉村昭「関東大震災」1977年（文藝春秋）

著者の歴史小説は綿密な調査に基づいて人物を描くことに定評がある。この著作は関東大地震の予報を巡っての地震学者である今村明恒と大森房吉の対立を描いたものであり、寅彦の出番は少ないが日記（大正12年9月11日）の今村博士との面談についての記載が引用されている。

◎ 山上明博『「うま味」を発見した男—小説・池田菊苗』 2011年（PHP研究所）

副題にあるように「味の素」の発明者であり、漱石との交流でも知られる池田菊苗の生涯を小説にしたものである。菊苗から寅彦に宛てた昭和7年12月13日付の書簡が残っており、前日に二人が触媒や縞模様について話し合ったことが分かる（場所は書かれていないが上野の学士院のようである）が、小説では寅彦が菊苗の自宅を訪ねたことになっており臨場感のある会話で描かれている。意外にもこの二人は古くから接点があり大正8年8月26日の松原湖行きでも同道している。

◎ 岳真也「小説 帝都復興」 2011年（PHP研究所）

後藤新平が関東大震災後の東京復興に関して活躍する小説である。上野の喫茶店で遭遇した地震の揺れを観察した「震災日記」と震災及び火災の被害を受け易い住宅事情について書かれた「からすうりの花と蛾」が引用されている。

小説以外では次の作品がある。

◎マキノノゾミ 戯曲「フユヒコ」1999年（小学館）

舞台でたびたび上演され、テレビでも放映されたのでご覧になった方も多いと思われる。寅彦の夫人（紳子さん）をモデルにしたりんさんの自由奔放な、当時としては「悪妻」と言われる言動、娘さんの恋愛事件の対応などを中心に、難しい家族構成で夫人の怨念を象徴する招き猫の破壊と再購入をユーモラスに描いている。

庭の藤の実が弾けることから潮時や因果律に思いを巡らす冬彦のつぶやきから随筆の着想もこうであったかも、と思わせられる。

手元の書では朝永振一郎や仁科芳雄が活躍する「東京原子核クラブ」も収録されている。

◎半藤一利 戯曲「夢・草枕」『漱石・明治・日本の青春』2010年（新講社）に付録として収録

著者は漱石の長女筆子の四女・松岡末利子（漱石の孫）の夫である。漱石の熊本赴任百周年を記念して制作され、1996年に東京で6回、熊本で1回上演されたとのことである。7幕構成。漱石の草枕を下敷きに峠の茶屋や那古井温泉を場面に行っている。寅彦は小宮、坂元と一緒に五高生として登場し漱石の前任者である小泉八雲を模したパーンと賑やかに議論を戦わせる。驚くのは水島寒月が草枕の画工として出てきてヒロイン那美さんとの恋に活躍することである。最後には漱石夫妻も出ているし舞台を見たいものである。

◎伊藤智義・作、森田信吾・画 コミック「栄光なき天才たち No.6」1989年（集英社）

研究成果の工業化によって研究費不足を解消した三代目所長の大河内正敏、ビタミン研究の鈴木梅太郎、日本的地球物理学の寺田寅彦、原子核物理の仁科芳雄を中心にして「科学者たちの自由な楽園」と云われた理化学研究所の盛衰を7章仕立てで分かりやすく描いている。全体としては仁科研究室の原子爆弾製造の挫折が主題である。

◎香日ゆら コミック「先生と僕 ～夏目漱石を囲む人々～」①～③

2010年（メディアファクトリー）

漱石とその学生時代の仲間、同僚、弟子達に関する文献を読み込んで四コマ漫画に描いている。弟子の中で寺田寅彦が別格であることがわかるエピソードなどもあり初心者でも楽しめる内容である。まだ書き継がれているようなので先が楽しみである。

以上のように、SF・探偵小説、歴史小説、戯曲、コミックといろいろなジャンルで取り上げられている。「猫」を踏まえた作品は数多くあるのでまだまだ寒月（寅彦）の登場する場面がありそうな気がする。会員の方からお教え願えたら幸いである。